

慈恩大師基の教学における人間観について

東洋大学 水谷香奈

本発表は中国法相宗の初祖とされる慈恩大師基（窺基：632-682年）の教学における人間観の中から、特に五性各別説を扱う予定である。周知の通り、この説は一切皆成説と対立するため、古来定性二乗や無性有情の存在に関して義論が交わされ、その経緯に関する先行研究も多いが、今回の発表は五性各別説の是非や仏性について中心的に論じるものではない。基の『妙法蓮華経玄賛』（以下『法華玄賛』）に説かれる不定種性に関する記述に目を向けながら、基と彼以前の諸師の解釈との関連を考察することで、基の人間観の一端を解明しようと試みるものである。発表に際しては、以下のような順序で論を展開したい。

『法華玄賛』は玄奘がもたらし基が整理した、いわゆる法相唯識の思想によって解釈されているため、まずはその解釈の前提となっている五性各別説の概要について概説する。また、『法華経』は一乗思想を説く経典として知られるが、基はその一乗は不定種性を対象とした教えであると位置づけている。そして五性すべてを対象とした一乗とは『勝鬘経』に説かれているとする。そのような基の一乗に対する解釈は吉村誠の先行研究で明らかにされているが、『勝鬘経』と『法華経』の同異については嘉祥大師吉蔵（549-623年）の『法華玄論』においてもいくらか議論がなされており、本発表ではその点にも言及しつつ、基の『法華経』観を確認する。

続いて、譬喩品を中心にして基が不定種性の声聞の機根についてどのように解釈したかを見ていきたい。五性各別説とは別に、衆生を上中下といった機根に分けて分析することは、仏教において広く行われており、『法華経』の註釈では基以前から譬喩品などに説かれる「法華七喩」について、声聞の機根の違いと合わせた解釈がなされてきた。基もそれを踏襲しているが、吉蔵の『法華義疏』では火宅の喩との関係で説かれている「上根は舍利弗のみ、中根は四大声聞、下根は五百人の阿羅漢」という説を、『法華玄賛』では「応化の声聞」すなわち菩薩の化作した声聞との関連で扱うなど、声聞の分類と合わせた独自の解釈を提示している。『法華玄賛』における比喩の解釈はこれまで先行研究がほとんどないが、智顛や吉蔵などの注釈書と比較しながら、基の独自性を解明したい。

発表者が最後に論じるのは、不定種性の声聞が大乘に転向する際の心の動きである。『法華玄賛』では心所によってそれを説明しており、人間の悔悟の瞬間における心が分析されている。声聞というと大乘仏教では軽んじられがちだが、我々は誰しも、ある時には自分中心に物事をとらえがちになり、それによって問題が生じた時に自らを省みて改めるといった精神的な営みを行っており、それは不定種性の大乘転向に重なるものがある。そのような趣旨から『法華玄賛』の記述を検討していきたい。

<キーワード> 『法華玄賛』、五性各別説、機根論